

古典紹介

「曹全碑」

全名を邵陽令曹全碑といい、後漢の中平二年（一八五）に作られたとされています。明の萬歴の初年に陝西省邵陽県莘里村で出土し、現在、原石は中国陝西省西安市の西安碑林に保存されています。

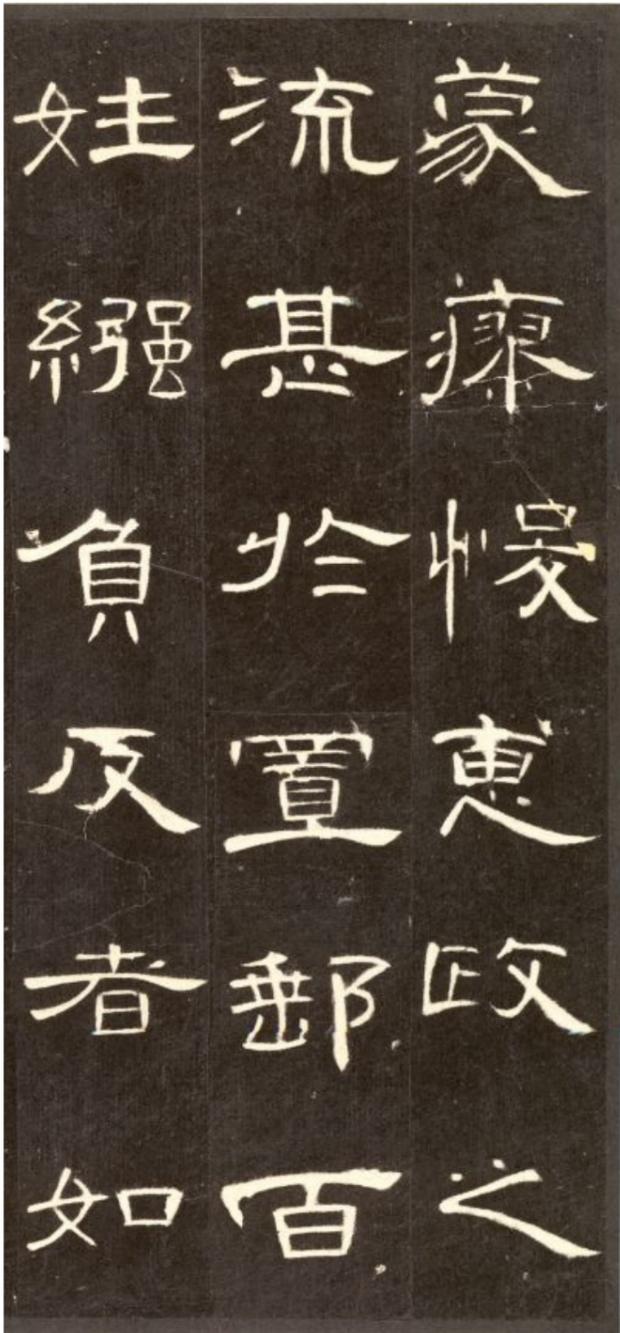
碑主の曹全は官使として有能だっただけでなく、武將としても活躍した人物です。黄巾の乱に際し、邵陽令を拝命して動乱の収束に尽力し、これを属官達が讚え、建碑を計画しました。しかしながら、政局の急変により曹全が失脚したことで、建碑に列名した人々が自分に累が及ぶことを恐れ、建碑されずに埋められたとされています。長く土に埋まっていたことにより、一点一画が鮮明で美しく、古来より多くの書人に愛されてきました。

書の観点からみた曹全碑は、典型的な八分隸です。漢王朝末期になり、かつての八分隸が失われていく一方で、曹全碑は伝統的な隸書の書法を完璧なまでに受け継いでいると言えます。また、特異な点として、ほかの隸書と比べて横長であること、字が小ぶりで向勢であること、重心を字の左側に寄せて長く太い波磔でバランスをとっていることが挙げられます。八分隸の二大傑作として並び称される礼器碑が、威厳を持ち男性的で力強い美しさを持つと言われるのと対照的に、曹全碑は流麗で洒落た女性的な美しさを持つと評されます。その美しさは、点画が殆ど完全な中鋒で書かれていることに起因します。

書家の加藤玉淵は、軽快さや女性的な柔らかさは曹全碑の持ち味であると同時に、弱みにもなり得るため、線の強さに気を配りながら臨書すべきだと説きます。つまり、形を捉え、筆法を学ぶばかりでなく自然な呼吸で線を引くことを意識するべきだということでしょう。字形や筆遣いに拘泥してしまうと、線が死んでしまい、持ち味である流麗さや軽快さを失ってしまう事になりかねません。

曹全碑は非常に基礎的な隸書でありながら、魅力に富み、また奥が深いものでもあります。ぜひ、鑑賞し、臨書してみてください。

(文責 佐藤)



<http://y-tagi.art.coocan.jp/koten026.htm>

エッセイ

「最近の趣味」

趣味を聞かれたら、最近では、ドラマや映画を観ることに答えるようにしています。ジャンルは様々、ミステリーから恋愛物語まで何でも観ます。（ただし日本の作品に限る。）そう答えるといずれは、好きな俳優は？と聞かれることが多いのですが、挙げるにキリがないのでいつも回答に困ってしまいます。今思いつく限りの好きな俳優を挙げてみると、橋本愛・杉咲花・浜辺美波・小松菜奈・永野芽郁・門脇麦・志田未来・伊藤沙莉・夏帆・・・、この辺りでやめておきます。（女性ばかりなのは気にしない。）俳優もその作品を楽しむ要素の一つなので、かなり意識して鑑賞します。そんなこともあって、ストーリーがイマイチでも役者の力で意外と面白いと思える作品に出会うことも多いです。最近観た中でイチオシの作品は、「ブルーアワーにぶっ飛ばす」。主人公の感情の動きが絶妙に表現されていて、ストーリーを通して自分の生き方を肯定してくれる作品です。

映画やドラマに限らず、「良い作品」とは、表現したそのもの以上のものを伝えることができている作品であると思っています。もちろん、ありのままを伝えることができるのも大切ですが、フィクションを作るのであれば、見たものそのまましか伝わらないのはつまらないと思うのです。例えば、「あなたが好き。」というセリフで、単に好きという感情しか観ている人に伝えられないのであれば面白くありません。そのセリフの言葉通りに以上をどれだけ伝えられるかが作品の魅力を左右するのです。書道でも文字以上の表現してみたいのですが、なかなか難しいです。

海外作品にも挑戦しようと思っっているのですが、なかなか時間がありません。何かきっかけがあれば頑張ってみるのかもしれないですが、どうしても日本の作品に引き寄せられてしまいます。

(文責 福島)

草書紹介「書」

我々のアイデンティティであり、実際に書く機会も多い字です。楷書だと画数が多く面倒ですが、草書だとこんなにすっきりします。王羲之風に書いてみました。（文責 山川）



広告欄

東北大学学友会書道部

ホームページ

<http://www.shodo.org.tohoku.ac.jp>

部員の作品公開中!!

広告募集中

